

要 旨

出稼ぎ労働者とその家族を取り巻く環境
—鶴見・川崎における南米系外国人を事例として—

横浜国立大学 教育人間科学部
人間文化課程 社会文化コース
1455111 久喜 淳史
指導教員 藤掛 洋子

本論文では、南米系出稼ぎ労働者の就業環境の変遷と定住化について記述する。特に、関東近郊で多くの南米系外国人を受け入れた京浜工業地帯近辺に位置する横浜市鶴見区と川崎市を調査対象地域とし、そこに関わる人々のライフヒストリーをとりあげる。それによって、南米系外国人とその家族を取りまく環境を明らかにし、長期滞在化が進むなかで、定住化が南米系外国人家族と日本社会にもたらす問題について論じたい。

1990 年の入管法改正に伴い、多くの南米系外国人が出稼ぎ労働者として来日した。その多くの人々が、派遣労働者として製造工場の労働に従事したが、2008 年のリーマンショックを契機として大量の派遣解雇が起こり、多くの出稼ぎ労働者が職を失った。そのため、かれらの多くが帰国をし、2008 年から 7 年間ほど南米系外国人の数は減少の一途をたどった。しかし、一方で様々な理由から母国に帰ることができず、仕事を転々としながら日本に住み続ける人々もいた。2015 年からはリーマンショック後に一度母国に帰国した人々が再来日することにより、南米系外国人の数は再び増加傾向を見せ始め、日本社会は滞在の長期化による社会保障問題や高齢化問題を抱えることとなった。

このような課題に対して、自治体をはじめとして NPO 団体やボランティア団体が草の根レベルの活動を行っている。しかし、すべての南米系外国人に支援の手は及んでおらず、自治体や NPO 団体からは「目に見えない存在」の南米系外国人がおり、今後大きな社会問題となることが予測される。

本論文では、短期滞在を目的に来日した出稼ぎ労働者が長期滞在化することによって、生じてくる問題と、日本の入管法改正時にとった政策と結びついた現象であることを論じる。それによって、滞在の長期化が労働者だけでなく、その家族にも「意図せざる結果」を招いてしまったことを明らかにする。南米系外国人のライフヒストリーを通して、かれらとその家族が現在どのような問題を抱えているのかを考察するとともに、今後日本が抱えるであろう問題に対してどのような対策を講じて行く必要があるのか考察したい。